2019年（平成31年）
1月号（No. 884）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

支部創立５周年記念事業の一つ「健康登山塾2018」を開催して …… 1
山本正嘉氏による安全登山のためのトレーニング講演会を開催 …… 4
飯山達雄さんと『朝鮮の山』 …… 6
アルバータ峰を巡る2本のピッケル …… 9
追悼　山崎英雄さんを悼む …… 10
東西南北 …… 11
活動報告 …… 13
　資料映像委員会／山行委員会
　アルパインフォトクラブ
支部だより　静岡支部 …… 16
新入会員 …… 16
図書受入報告 …… 16
会務報告 …… 17
ルーム日誌 …… 18
会員異動 …… 18
INFORMATION …… 19
編集後記 …… 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

支部創立５周年記念事業の一つ「健康登山塾２０１８」を開催して

「山や自然を愛好し、健康力と登山力のステップアップを志向する方」を対象に、昨年の春から秋にかけて群馬支部が「健康登山塾」を開講した。赤城山をフィールドとして医療スタッフの指導の下、塾生個々の健康増進登山のスタイルを追求するという試みだが、実施内容とその成果について、塾長の斎藤繁理事に報告していただいた。

健康登山塾２０１８塾長　斎藤　繁

群馬支部は創立５周年記念事業の一つとして「健康登山塾」を企画したところ大きな反響があり、嬉しい結果を得られました。中高年登山者の多くの方々が若いときのイメージのまま山と対峙していることと思いますが、実際は高血圧、腰・膝の痛み、基礎体力および心肺機能の低下など、危険と背中合わせのままに登山を行なっております。このような個々の状況が数値で表現され、今後の活動に具体的な指針を与えられたことは、塾生のみならず群馬支部スタッフにも大きな収穫であり、社会に大きく貢献できた企画として高く評価されるものと考えております。

（群馬支部長　北原秀介）

定員15名に１１９名の応募

日本山岳会群馬支部の活動として地元自治体や大学、新聞社の共催を得ながら「健康登山塾」を開催した。地元の山々を歩きながら健康増進を図ろう、山登りの実力アップを図ろうという趣旨で計画を練り、事前に発刊した『登山を楽しくする健康トレーニング』（上毛新聞社、２０１７年発刊）をテキストとした。

昨年は初回の街中の公園での歩行練習を除いては、すべて赤城山のコースを開催地としている。第２回と最終回は全く同一のコースとして、塾での活動成果が評価できるように配慮した。定員15名で募集したところ１１９名の応募があり、抽選で25名が塾生となった。参加者の平均年齢は58歳（42～77歳）、男性13人、女性12人であった。なお、６名の塾生からは塾開始時に高血圧症の自己申告を受けた。

医療スタッフとして、毎回医師３～４名、看護師2名が付き、活動前後や歩行中のアドバイス、データ測定の補助を行なった。コースのガイドは、日本山岳会群馬支部会員が毎回10名程度で担当した。

第１回は座学からスタート

ステップを上下して着地圧の測定

個人別の成績表と修了証を授与

初回、第2回の歩行状況から歩行スピードなどを参考に毎回3班への班分けを行なっている。各回ともコースの特徴に合わせて特別に意識すべき健康管理上の注意事項を設定し、参加者には課題を意識しながらの歩行を心掛けていただいた。活動前後と活動中の数回、心拍数や血圧の測定を行なった。また、活動の前後で簡易な着地圧測定を行なった。

全7回の開催内容については添付の「開催記録」をご参照いただきたい。数名の個人の事情による欠席があったものの、各回とも非常に高い出席率となっている。なお、参加者には、日々のトレーニングが重要であり、塾開催時の運動は確認作業であることを十分ご理解いただいた。途中アンケートでは、ほとんどの塾生が週に3回程度、毎回30分程度の運動を心掛けていることが確認できた。

全7回の登山塾終了後、収集したデータの集計を行ない、個人別の成績表と修了証を作成した。別途開催した「まとめの会」において各人に両書式を授与し、同時に集計結果の概要と医学的な考察内容を解説した。

活動中の血圧変動は、平地でのランニングや自転車エルゴメーターでの測定で報告されている結果と類似しており、運動開始早期の血圧上昇や運動終了時の低下が観察された。運動開始時には収縮期血圧が200㎜Hgを超えることも稀ではないことを参加者に確認してもらうことができた。回を重ねるごとに血圧変動が小さくなる参加者が多かった。心拍数は各回とも毎分100回程度に維持している参加者が多く、運動負荷レベルとしては、ほとんどの人にとって余裕を持った有酸素運動レベルとなっていたと考えられた。

着地時の圧力（今回は約40㎝のステップを下るときに発生した圧力から同段差を上がるときに発生した圧力を引いた値を指標とした）も回を重ねるごとに小さくなる参加者が多く、トレーニングの成果により、下りでの着地が丁寧になっていることが想像された。最も著しい成果があったと考えられる塾生では、第2回の開催時には山頂に時間切れで到達できなかったにもかかわらず、最終回には余裕を持って山頂に到達できている。塾での動機付けやアドバイスにより、ご本人の運動習慣確立や生活改善が図られ、健康増進につながったと考えたい。

まとめの会ではすべての参加者から高評価を得ることができた。塾生には、塾修了後も登山を楽しみながら運動習慣を継続し、山に囲まれた群馬県の地の利を活かした健康管理を行なうようアドバイスした。今後、全国各地において類似の健康増進活動が行なわれ、「登山を楽しみながらの健康増進」が健康長寿国日本の良き伝統となることを期待したい。

行動中も常に血圧をチェック。地蔵岳にて

【開催記録】

第1回：4月21日㈯　群馬県庁昭和庁舎および前橋公園（気温21～22℃、湿度43～44％、風速2ｍ／秒、降水量0㎜：参加塾生23名）

スタッフの紹介、塾生の自己紹介の後、塾の方針や血圧測定法の解説を行なった。その後、前橋公園に移動し、上段公園から利根川河岸まで2周のウォーキングを行なった。市街部の公園などでも登山に類似の歩行訓練が可能であることを実感してもらった。

第2回：5月12日㈯　赤城山・鍋割山、獅子ヶ鼻コース往復（気温15～20℃、湿度29～48％、風速2～3m／秒、降水量0㎜：参加塾生25名）

準備体操、血圧、着地圧測定後、約90分から120分で鍋割山山頂に到着した（1名は下腿筋肉痙攣のため大休止し、そのポイントより下山）。体力に余裕のある7名は荒山高原側に10分程度追加歩行後下山とし、その他のメンバーは、中間点でアドバイスなど受けながら約70分で下山を完了した。

休憩中も塾長のレクチャーが。鍋割山にて

第3回：6月16日㈯　赤城山・鳥居峠～利平茶屋往復（気温8～10℃、湿度90～100％、風速1～2m／秒、降水量0～5㎜：参加塾生20名）

小雨で気温もかなり低めのなか、雨具を着けて雨の中の歩行練習となる。先に下ることで、筋疲労の少ない状態で下肢関節が安定して下れるかを体験してもらう。

第4回：7月7日㈯　赤城山・駒ヶ岳および黒檜山（気温11～15℃、湿度90～100％、風速1～3m／秒、降水量0～5㎜：参加塾生15名）

阪神方面が大雨で災害情報もあり、欠席が多くなった。天候不良のため、とりあえず駒ヶ岳を目指した。早い班は黒檜山の山頂を経由して下山し、遅い班は駒ヶ岳から直接同じルートを下ってもらう。下りでは濡れた岩でのスリップに注意し、重心を低めに保つ練習を心掛けてもらう。

第5回：9月8日㈯　赤城山・地蔵岳（気温18～20℃、湿度70～90％、風速1m／秒、降水量0㎜：参加塾生23名）

緩傾斜地では、なるべく歩行を停止せずに心拍数を整えることに注意を払ってもらう。このコースでは傾斜度が大きく変化するので、全体として登りの傾斜度と心肺機能への負荷の関係を実感してもらう。また、着地面が安定している所では、ストック所持者には積極的に活用してもらい、バランス保持だけでなく、下肢関節への負荷を上肢や体幹部に分散させることも心掛けてもらう。

第6回：10月13日㈯　赤城山・荒山（気温7～13℃、湿度71～62％、風速2～3m／秒、降水量0㎜：参加塾生24名）

短いながらも平坦地、木枠階段、岩場、緩傾斜地、急登など登山道内のバリエーションが多いルートの特性を活かし、足元の変化に合わせて歩き方、特にスピードや体勢を調整するコツを練習した。各班ともほぼきれいに10分程度の違いで順次山頂に到着し、下山時間の差異も20分程度であった。

第7回：11月17日㈯　赤城山・鍋割山、獅子ヶ鼻コース往復（気温6～14℃、湿度42～67％、風速3～6m／秒、降水量0㎜：参加塾生20名）

富士山が遠望され、弱い北風があるが気温は10度前後と、運動には快適な気象条件となった。急傾斜終了部、山頂、下山後を含む合計5回血圧測定を行なう。速いメンバーは山頂到着後、引き続き荒山高原を往復する。上りは60分から100分程度で全員登頂した。下りは60分から90分であった。第2回と同じコースなので、各個人も約半年間の変化を確認できた。

（群馬大学大学院医学系研究科教授）

REPORT

山本正嘉氏による安全登山のためのトレーニング講演会を開催

医療委員会　植木貞一郎

２０１８年11月26日に医療委員会は、日本山岳文化学会・山岳医学医療分科会と共催し、オリンピック記念青少年センターで、山本正嘉氏（鹿屋体育大学）による講演会「登山中に身体のトラブルを起こさないためのトレーニング法 ～20歳から80歳代まで役立つ知識～」を開催した。

山本氏は運動生理学者で、２０１６年に『登山の運動生理学とトレーニング学』を著わしている。参加者は１０５名で、会場はほぼ満席だった。山本氏は〝行きたい山を行ける山に〟するためにはどうしたらよいかという視点に立って、長年の研究成果を分かりやすく講演した。

以下、講演の概要を記す。

合理的で役に立つトレーニングを

健康に良い運動とは、強度が高過ぎないこと、長時間行なえること、運動のリズムが規則的でゆっくりしていることである。登山は適切に行なえばこの３条件を満たし、ベストの有酸素運動である。適切な強度の登山は心肺能力を改善し、脂肪を減らし、筋と骨を強くする。逆に病気や体力不足の人が強度の高過ぎる運動をすると心臓を壊したり、転倒して事故につながることにもなる。運動の強さは、丹沢の日帰り登山でも登りではサッカーやテニスと同等の強度で、その強度と持続時間に耐えられる準備が必要である。

２０１４年の長野県の遭難事故統計では、登山経験10年以上の中高年登山者の事故が突出して多かった。彼らは、健康状態は良好で定期的なトレーニングをしていると自己評価したが、実際に行なっていたトレーニングは平地でのウォーキングや短時間の階段昇降など、強度も持続時間も不足していた。別の調査でも、山岳会のリーダーを務めるベテラン登山者の体力は、同年代の一般人よりも高かったが、健脚者コースで要求される体力の基準を４割の人が満たしていなかった。このように、多くの登山者が自分の体力を過信したり、役に立たないトレーニングに自己満足している実態が明らかになった。

さらに、年齢で体は変化するので、体力の過信は禁物である。第一線で活躍する山岳ガイドでも年齢を重ねると、体力も平衡感覚も敏捷性も著明に衰える。60歳まではトレーニングで身体能力を保つことができるが、これを過ぎると、努力をしないと衰える一方である。合理的なトレーニングが必要となるが、そのために次のようなことが必要である。

◆行きたい山に見合った体力を付けるトレーニングをする。

山のグレーディングを使い、段階を踏んで山行のレベルアップを行なうのも一法であるが、行きたい山に必要な体力と、現時点の体力をそれぞれ書き出し、ギャップを認識する。ギャップを埋めるために何をすればよいか、自ら考え実行することこそがトレーニングである。

◆どのようにトレーニングすればよいか。

万人に有効な黄金律のようなトレーニング法はない。それぞれの目標とするものも、持つ能力も異なり、ギャップも人それぞれである。自ら考え、試行し、検証し、改善することが自立した登山者をつくる。その上で根幹となるトレーニングとして次の４つを紹介する。これを基に各自が工夫をし、オリジナルのトレーニング法を作ってほしい。

トレーニングに対する考え方を熱く語った山本講師

独自のトレーニング法を作る

(1)低山トレーニングをしよう。

標高差５００ｍの金立山を週１

回水曜日に登山する会のメンバーの体力は十分で、生活習慣病や骨粗鬆症も少なかった。1ヶ月間に上り2000m、下り2000mの登降をすることにより、北アルプス縦走にも耐えられる体力が付く。頻度も大切であり、60歳代は月3～4回の山行回数が必要である。コンスタントな低山トレーニングこそ理想である。

(2)心肺トレーニングをしよう。

平地では、運動強度を重視して最高心拍数の70～80％が得られるような運動を、ある程度の長さ行なう。ジョギングは足腰の刺激、運動強度、持続時間という点で理想に近い運動の一つである。

(3)筋力トレーニングをしよう。

安定した歩行、下りでの筋障害防止、膝痛予防には日常的な筋トレーニングが必要である。大腿四頭筋を鍛えるスクワット、腹筋を鍛える上体起こし、腸腰筋を鍛える足上げが推奨される。

(4)バランス・トレーニングをしよう。

60歳でも、体力や筋力はトレーニングによって20歳の7割程度は保つことができる。しかし、バランス感覚はトレーニングを行なっても20歳の4分の1に低下する。バランス、敏捷性、柔軟性を保つための「登山体操」をNHKの依頼で考案した。NHKのホームページで見ることができるので、ぜひ取り入れてほしい。週3回は行なうと効果的である。

ほぼ満席となるほど人気だった講演会場

最後に、ネットで気軽になんでも検索できる時代となり、安易に答えだけを求める風潮が危惧される。この講演会で伝えたいことは、答えではなく考え方であることを強調したい。

講演終了後も受講者から数多くの質問があり、活発な議論が行なわれた。

＊

終了後のアンケート回収は88名で、結果は次のようだった。性別は男性51名、女性29名だった。年齢は30歳台5名、40歳台8名、50歳台22名、60歳台33名、70歳台17名、80歳台以上3名と、6割が60歳以上で、40歳未満は5名だった。当日はYOUTH CLUBの例会日に重なり、若い方の参加が少なかったと思われる。

所属はJAC会員37名（42・0％）、他団体14名（15・9％）、無所属37名（42・0％）で、JAC会員の内訳は東京多摩支部18名、神奈川5名、首都圏2名、埼玉2名などだった。会員外が半数を超え、公益に資する会だったと考える。

講演会を知ったきっかけはJACの会報17名、JACのHP16名、JACのML13名で、ほかにフェイスブック6名、口コミ37名、雑誌『山と渓谷』5名、ヤマケイ・ウェブ7名、ほかの講演会場の配布チラシ3名だった。

評価は「とても良かった」65名、「良かった」23名、普通以下はなしで、大変好評だった。感想は、身近な内容で役に立った、もっと早く聞いておきたかった、異なる視点の話を聞き新しい知識を得た、今日の講演会を感謝する、などだった。

具体的な内容については、低山トレーニングと筋トレの必要性が分かった、継続することと自分の体は自分で考えて実行することの重要性が分かった、登山体操やコース定数が興味深かった、などだった。他方、トレーニング内容についてもう少し詳しく教えてほしかった、という感想もあった。

登山にとってトレーニングが重要であることは理解していても、実際に何をすればいいのか分からないという悩みに対して明快な指針が示された。登山者の健康と安全に資することができ、充実した講演会だった。これらの結果を今後の医療委員会の活動に活かしていきたい。

PERSONAL HISTORY

飯山達雄さんと『朝鮮の山』

児玉　茂

仁寿峰での泉靖一との出会い

泉靖一の遺著『遥かな山やま』（1971年）には、梅棹忠夫による「あとがきのためのまえがき」が付けられ、1930年代の内地の学校山岳部の活躍と朝鮮の場合の違いが鮮やかに対比されている。この本の前半部分には朝鮮における近代登山の様子が、その初期から詳しく描かれていて参考になる。朝鮮の山については、戦前にも泉の先生（京城大予科）であった竹中要の『半島の山と風景』（1938年）がある。冠帽峰（クンモボン）・民幕谷の積雪期登山など記述の大半を学生たちと登った登山の記録が占め、巻末には泉の済州島・漢拏山（ハンラサン）の積雪期初登攀記が載せてある。そして、もう一人、京城には泉の登山の師匠である飯山達雄がいた。

『泉靖一著作集　3』（1972年）の月報に、飯山が書いた「少年時代の靖一君」が載っており、昭和4（1929）年春に飯山が北漢山（プカンサン）の仁寿峰（インスボン）の壁を登って寛いでいるときに、「おじさん、どこ行ってきたの？」と、イガ栗坊主の紅顔の少年に声を掛けられたのが出会いだった、と書いている。

飯山は当時、朝鮮総督府鉄道局の旅客課に勤めていて、「山とスキーの宣伝、それに総督府の外郭団体である金剛山協会の施設担当の幹事を兼務していた関係から、金剛山や北朝鮮の山へ出かける機会が多く、連休や夏冬の休みの山行には、よく靖一君を誘った」とある。内地から登山にやって来る登山者たちの手続きや準備などの面倒もよく見ており、ときには同行もしている。飯山はまた写真家としても有名で、のちに写真集を10冊以上出している。したがって、当時の朝鮮の山を写した写真の大半は飯山の作品である。

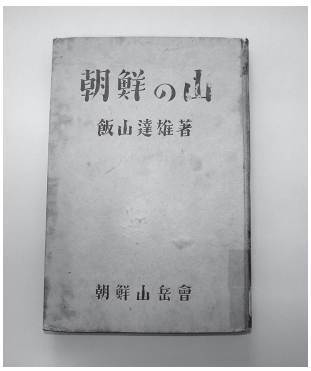
飯山と泉は朝鮮での登山以外にも大変縁が深く、戦後のアンデス調査にまでつながっている。泉の昭和11（1936）年の大興安嶺（ターシンアンリン）の調査や、12年の京城大学の蒙疆学術調査隊に写真班として同行している（このときの写真集『蒙疆の旅』〈1941年〉が出版されている）。

太平洋戦争が始まって昭和18（1943）年1月には、海軍が田山利三郎を隊長に占領下の西ニューギニアに大規模な設営隊を含む調査団を派遣した。泉はその本部要員としてのマネージメントと、人類学調査を担当、飯山も写真班として参加した。飯山はその写真技術を買われ、零式水偵に搭乗してフォーゲルコップ半島北岸のマノクワリ周辺の空中写真の撮影を担当し、それは作戦地図となって活かされたという。

『台湾山岳』と『朝鮮山岳』

戦前の台湾と朝鮮には、現地に居住する日本山岳会員を含む登山愛好家たちによって、台湾山岳会（昭和2年）と朝鮮山岳会（昭和6年）が設立されていた。台湾では沼井鐵太郎が熱心に会を運営していたことはよく知られている。朝鮮では飯山がその創立会員の一人となって、アクティブに山に登っていた。それぞれの会では『山岳』に倣って『台湾山岳』、『朝鮮山岳』が発行されていた。

ところが日本の敗戦によって、特に朝鮮では、困難な本国への引揚げがあり、その中に関係者もいたはずだが、なんらの引き継ぎがなされることなく、両山岳会の存在は幻となってしまうのである。日本山岳会図書室には『台湾山岳』の第1号～3号だけ所蔵されているが、『朝鮮山岳』については山岳書の研究者でさえ情報がほとんどない状態である。〈注〉



飯山15年間の苦心の結晶

日本山岳会の「会報」15号（昭和7年5月）の「山の消息」欄には「朝鮮山岳会の設立」の記事があり、昭和7年3月の会員数は23名、『朝鮮山岳』は隔月発行とあり、その「一号が届いて初めて朝鮮山岳会の設立を知った」とある。その創刊号は「菊判56ページ、写真2枚、7年4月発行」。目次内容も記されていて、飯山は泉とともに登攀した金剛山（クムガンサン）「冬季毘盧峯登行（上）」を寄稿している。

本文見開き写真。山は咸鏡山脈の主峰、冠帽連山

『朝鮮山岳』創刊号は台湾山岳会にも届けられたことが、当会の月報「台湾山岳彙報」Ⅳ－6（昭和7年6月）の記事によって分かる。「雑誌『朝鮮山岳』は当分の間年に3回発行するもので、創刊号は総頁56頁、口絵2葉、紀行10数篇を載す。記事は皆朝鮮の山岳に関するもので、此の点本会雑誌とともに特殊地方山岳会の機関誌としての特色を発揮している」と沼井によって紹介されている。

「会報」には『台湾山岳』の第6号と第11号の紹介記事が見え、第12号まで発刊されたらしいことが分かる。一方の『朝鮮山岳』については「会報」23号（昭和8年2月）の新着図書欄に第2号、43号（昭和10年2月）の新着図書欄に3号が載っているので、不定期ながら第3号までは発刊されたことが分かる。やや間が空いて昭和13年7月の新着図書欄には「朝鮮山岳会会報」という誌名はあるが『朝鮮山岳』ではない。14年9月の「会報」88号の「受贈会報部報雑誌」リストにも朝鮮山岳会の「会報」が記載されているが、それ以上の内容は不明である。

戦時下、『朝鮮の山』を上梓

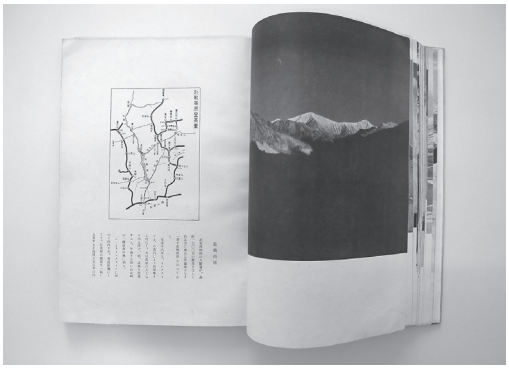
昭和10年は日本山岳会創立30年の年に当たり、共立出版から全8巻の『山岳講座』が木暮理太郎の監修で発刊された。この第4巻の「山の案内」は朝鮮の山、台湾の山で、それぞれ竹中要、沼井鐵太郎の両氏が執筆している。「朝鮮の山」の執筆にあたって竹中は、「この稿を草するに当たって立岩巌、飯山達雄、後藤武憲、泉靖一の諸君に多大なる援助を仰いだ。厚く感謝する。」とあり、概説と赴戦湖周辺を除く山域の案内記は、地図を含めて飯山らの登山記録に基づいて書かれているようである。

『朝鮮山岳』ないし「朝鮮山岳会会報」の発刊が勢いなく途切れてしまったのは、アクティブ・メンバーである飯山と泉が引き続き満州や内蒙古に出掛けていたためかもしれない。その飯山の著作の紹介が、唐突に「会報」131号に載った。昭和19年5、6月号で、「会報」が休刊になる前の号である。多くの会員が戦地にあり万事が窮乏するなかで、木暮会長の訃報までもこの号に載っている。図書紹介欄に載ったのは、飯山達雄著『朝鮮の山』で、「飯山氏十五年間の苦心の結晶で、今時としては眞に珍しい総アート約二百五十頁の豪華版で、朝鮮の山に興味を持たれる方には好参考となろう。（非売品。昭和18年7月朝鮮山岳会発行）」とある。

『朝鮮の山』は30㎝×21㎝×2㎝の大判縦長の装丁で、写真ページ122、総アート紙で144ページ。朝鮮各地の山の吟味された写真と、白頭山（ペクトゥサン）、冠帽連山、赴戦高原（チリサン）、金剛山、雪嶽山（ソラクサン）、智異山（チェリサン）、済州島（チェジュ）（漢拏山）の各案内と概念地図で構成されており、その案内の内容は前記した『山岳講座』第4巻とほぼ同じである。「写真の夫々は単なる楽しみに撮ったものでもなければ、また美しさを誇るためにものにしたものでもない。言ふべくば、文字によって記述するよりも忠実に、直接眼に訴へることを念願に置いたカメラ駆使による記録である。説明不足の点は記事を以て補ひ、一山塊毎の案内と共に自分の登高ルポルタージュとして編輯をした。此の小冊子が朝鮮の山に就いて聊かなりとも理解の資とならば望外の歓びである。」と自序に記されている。

自序の日付は昭和17年10月1日となっているが、印刷発行は昭和18年7月28日で、東京で印刷されている。おそらく写真印刷のできには気を遣って校正を繰り返したはずである。しかし、発行された時点でご本人はニューギニアにいたはずであり、19年に京城に戻りそれを手にしたか、あるいは東京の印刷所で初めて『朝鮮の山』を手に取ったのかもしれない。

この『朝鮮の山』は稀覯書に属するもので、現時点では、ある地方公共図書館に昭和21年6月に寄贈された1冊が確認されるだけである。次の「会報」132号（戦前最終号）には囲み記事として、「朝鮮の山　前号で紹介した本会会員朝鮮山岳会の発行になる飯山達雄著


本文地図と写真。地図は赴戦高原、山は冠帽峰主峰と中冠帽

『朝鮮の山』を、希望者があったら頒たれたいと、同会から数部委託されました。同書は非売品ですから市場には出ておりませんので、一寸手に入り難いものと思われますので、お預かりしてありますから希望の方は事務所迄お問い合わせ下さい」とある。

自称バガボンドの生涯

飯山の戦後の著作『バガボンド12万キロ』（1962年）などを見ても時間的矛盾があって、残念ながら明確な行動経過をたどることはできないのだが、飯山は昭和19年3月には東京にいて、22日には日本山岳会主催の小集会で講演をしている（同じく「会報」131号の会務報告に載っている）。おそらくこのときに飯山自らが『朝鮮の山』数冊を持ってきて、日本山岳会に委託したのであろう。

このときの演題は「ニューギニアとジャワの旅」で、二十数名の来会者があった。飯山の身分は海軍嘱託となっており、前記したニューギニアでの調査活動について話をしたらしい。司会者はニューギニア調査隊員であったことを説明した後に、「それよりも朝鮮鉄道の飯山さん、写真の飯山さんといえば知る人も多いであろう。」と紹介した。「今頃演題に『ニューギニアとジャワの旅』なんて名をつけたのは、自分のニューギニアに於けるどぶ鼠のような生活と、ジャワに於ける王侯のような生活と、その差が余りにも大きかったのでかく名付けた次第であると冒頭された」とある。

飯山は昭和18年10月に、ニューギニアを離れる際に現地で小舟を雇い、セーラム島、アンボン島を経由してフローレス島、そこから小スンダ列島を西にたどってジャワ島のスラバヤまでの冒険航海を行なった。ジャワで滞在後、パレンバン、クアラルンプール、サイゴン、ハノイ、香港、台北、上海、北京を経由して京城の自宅に戻った。その後の足取りは不明ながら、とにかく19年3月には東京にいた。この飯山の講演は興味津々で、「この講演の内容については詳細を近く『山岳』に発表していただく事になっているから期待されたい。」とある。しかし、次の次の『山岳』は残念ながら発行される状況にはなかった（昭和18年9月発行の第37年1号をもって休刊となり、次号は昭和23年11月の第43年1号となる）。

飯山が亡くなる前、『北朝鮮の山』というタイトルの写真集兼登山記の準備がされていた。しかし、出版される前の1993年に旅立たれた。88歳であった。その遺志はご子息に引き継がれて、1995年に『北朝鮮の山』が国書刊行会から出版された。サイズは『朝鮮の山』より横幅が2㎝広くなっている。写真のうちの何枚かは『朝鮮の山』に使われたものだが、初めて見る貴重な写真が多数ある。山域の地図が一切省かれているのは、戦後日本との関係を気遣ってのことかもしれない。本文は、はじめの章で朝鮮における登山の発展を追い、続いて飯山自身の詳細な未発表の登山記録が載せられている。ご本人の原稿のほかに同行者による書き下ろし原稿を含めてある。その同行者の一人は、朝鮮山岳会の会員として数多くの登攀記録を持ち、日本山岳会の熊本支部長も務められた奥野正亥である。巻末には飯山の朝鮮における登山とスキーの開拓活動および登攀の年譜が付けられている。

2018年になって北朝鮮に動きが見られるようになってきた。もしかすると近い将来に、かつて飯山や泉が活躍した朝鮮の山々を自由に登れる日が来るかもしれない。そのときには、この『北朝鮮の山』がきっと助けになるに違いない。

〈注〉公開されている北大山岳館資料の中に『朝鮮山岳』第3号の所蔵が確認できるが、由来は不明である。

『山書月報』616号（2014年5月）には、上田茂春さんが『朝鮮山岳』創刊号と第3号を入手されたことが載っており、韓国国立中央図書館には『朝鮮山岳』の創刊号から第4号が所蔵されているようである。

（文中敬称略）

REPORT

アルバータ峰を巡る2本のピッケル

サッチ益田（益田幸郎）

日本山岳会初の海外遠征隊が1925（大正14）年、カナディアン・ロッキーのジャスパー国立公園にある未踏峰アルバータ（3619m）に初登頂したことは、今もジャスパーの町で語り継がれ、尊敬されている。槇有恒隊長の下、5名の隊員とスイス人ガイド3名は同年7月21日に頂上を踏み、後援者の細川護立侯より託されたピッケルを頂上に残した。これが1本目のピッケルだ。

頂上に残されたピッケルは、23年後の1948年7月30日に第2登を果たしたアメリカ隊のジョン・オバーリン、フレッド・アイレスが見付け、氷に埋もれた石突き部分を残してアルバータの登山基地ジャスパーに持ち帰った。

2本目のピッケルは、ジョン・オバーリンとフレッド・アイレスにより頂上で見付けられた1本目のピッケルのレプリカで、1949年に両氏により本会に贈られ、保存されていた。1本目の石突き部分のないピッケルは、その後ニューヨークのアメリカ山岳会本部に展示され、1995年からジャスパー・イエローヘッド博物館に2000年まで展示されていた。

2000年にアルバータ峰初登頂75周年の記念行事が、ジャスパーの町で盛大に開かれた。アルバータ峰ジャパニーズ・ルートの日加合同登山隊や、ジャスパー国立公園のトレッキングに100名を超す会員が参加した。不明だった石突き部分は、1965年にアルバータ峰第5登を果たした長野高校山岳班OB隊により見付けられていたことが分かり、記念会場で75年ぶりに本体と石突き部分が合体され、盛大な歓声に包まれた。合体されたピッケルは、ジャスパー・イエローヘッド博物館に永久展示されることになった。

なお、これらの経緯については、『山岳』第百十年（2015年）に芳賀孝郎会員が「アルバータ峰登頂90周年と伝説のピッケル」と題して詳述している。

私はカナダ山岳会のポール・ゲッツ氏と記念行事のツアーで知り合った。5年前に来日したゲッツ氏とアルバータ峰の話をしているとき、2本のピッケルを並べてジャスパー・イエローヘッド博物館に展示すれば、アルバータ峰だけでなくカナディアン・ロッキーの登山史がよく分かるのでは、とゲッツ氏より相談を受けた。

2018年2月、カナダ山岳会、ジャスパー国立公園、そしてジャスパー・イエローヘッド博物館より2本目のピッケル展示について本会に正式な要請があり、カナダ山岳会経由でジャスパー・イエローヘッド博物館に寄贈されることが7月に決まった。

2本目のピッケルを挟んで、サッチ益田会員（左）とポール・ゲッツ氏

2018年夏、私は歴史的なこのピッケルを持ちカナダに向かった。8月13日、ポール・ゲッツ氏とともにジャスパー・イエローヘッド博物館を訪ね、館長のロブ・ヒュービック氏に2本目のピッケルを手渡した。2000年の日加合同アルバータ峰登山隊員も同席し、国立公園のチーフ・ワーデン、ジャスパー市長、そして地元新聞記者も歓迎してくれた。

2019年夏に2本目のピッケルは1本目のピッケルと肩を並べ、初登頂隊員の三田幸夫氏の写真アルバムとともに永久展示されることが決まっている。人口4000人の風光明媚なジャスパーの小さな博物館だが、西部開拓史の展示も充実していて、槇隊長が率いた1925年アルバータ峰登山隊の冒険に触れることもできる。

問い合わせ先 Jasper-Yellowhead Museum & Archives, www.jaspermuseum.org

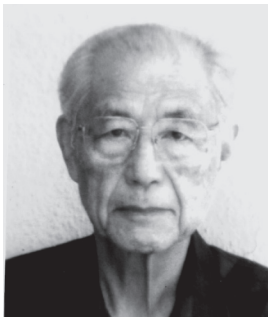
〈注〉フレッド・アイレスは、英語の発音ではフレッド・エイアーに近いのだが、2000年の日加共同記念出版物により、フレッド・アイレスにした。

（日本山岳会・カナダ山岳会会員）

追悼
OBITUARY

山崎英雄さんを悼む

高澤光雄



山崎英雄（やまざき・ふさお）
会員番号4038

山崎英雄さんと初めてお会いしたのは、１９５４年春である。私は51年４月に丸善㈱札幌支店に入社、３年後に医学書販売員を命じられた。北大医学部や札幌医大、あるいは北海道各地の病院を訪れて販売するのである。山崎さんは札幌医大生物学講師を担当されていて、山好きな先生なので毎月のように通ってお世話になった。

山崎さんは１９２４年３月20日、山崎春雄氏の３男として札幌市中央区で出生。春雄氏は北大医学部解剖学第一講座教授で、１９５０年に札幌医大を創設して解剖学教授に就任し、３年後に退職された。

山崎さんは１９４３年に北大に入学、山岳部にも所属し、翌年から６年間を幹事として活躍された。

当時は日高山脈の未踏ルートに各山岳団体が競って挑んでいた時代で、山崎さんも精力的に山行を重ね、主に冬期の初登頂記録をたくさん残している。また、北大山岳部・山の会「会報」第21号（１９４９年６月発行）によると、「主任幹事兼記録・山崎、日本山岳会北海道支部発足。１９４８年12月21日、日本山岳会北海道支部設立趣意書発送のため１５０円立替（未返却）」と記されている。北大山岳部の運営のみならず、同支部設立にも意を注がれていたことが見て取れる。

支部設立総会時の支部長は村上善彦・北海道山岳連盟会長で、山崎さんも委員に名を連ねている。同年９月３日に支部総会が開催され、支部長に山崎春雄氏が推薦された。その年の12月末までの入会者は77名となっている。

山崎さんは北大医学部附属医学専門部を経て、農学部生物学科に進学して卒業。１９５２年６月に札幌医大解剖学教室に勤務、医学部進学課程が設置され、生物学・伊藤秀五郎教授の下で助教授を務める。１９８２年に生物学教授となり、６年後に退職された。

１９５０年代は世界各国の眼がヒマラヤに向けられ、日本山岳会でもマナスル登山を計画中で、登山隊員を募っていた。山崎さんも日高山脈での登山記録が認められ、第１次マナスル登山隊に参加することになり、１９５３年１月30日付で日本山岳会に入会した。

また、１９５９年11月から翌年３月にかけて、日本雪男学術探検隊に参加、『山岳』第55年に25ページにわたって、同じく隊員の大塚博美氏と「冬のソロ・クーンブ」を共同執筆している。この『山岳』と、山崎さんが第１次マナスル登山隊で撮った写真が掲載された『山岳』第49年の２冊を札幌医大へ訪れた際に頂戴した。感銘を受けた私は１９６１年10月、日本山岳会に入会した。

また山崎さんには、１９５０年８月22日から31日にかけて、ヌプントムラウシ川からトムラウシ川に乗越し、地獄谷温泉を発見したユニークな記録がある。北海道新聞１９８４年７月30日夕刊に大見出しで「新得町の東大雪地獄谷温泉、山上の秘湯で至福の湯あみ、沢登り４時間、ブームとは無縁」と現地の写真入りで報じられた。そして、８月４日夕刊に「幻の東大雪地獄谷温泉、見つけたのは私たち、北大山岳部44年前の夏、４人で踏査」と大見出しが打たれ、山崎さんの写真入りで掲載されたことがある。

山崎さんは90歳までスキーを履いて近くの円山公園などを歩いていたが、２０１５年４月25日にご自宅で脳梗塞を発症。２年半余り車椅子に頼って介護生活を続けられたが、次いで胆嚢炎を発症して入院。手術を受けて療養生活を送っていたが、残念ながら２０１８年８月１日、94歳５ヶ月の命を全うし他界された。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

N
西　東
北　南
S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

幻の高丸山

前田英昭

偉大な学者であり登山家であり、日本山岳会の会長でもあった今西錦司氏は、90歳の生涯で１５５２座の山に登られた。最後の山になったのは神戸の高丸山である。私事で恐縮だが、私は昭和20年に中国河北省の張家口市で生まれた。ちょうどそのころ張家口市にあった西北研究所の所長として今西錦司氏がおられた。満州、蒙古の民族学的研究を行なう研究所である。

しかし、ソ連の参戦で大混乱となる「張家口邦人4万人奇跡の脱出」といわれる逃避行が始まり、両親は生まれたばかりの私を抱いて北京に脱出。その無蓋列車に今西氏も乗っていたはずだ、とは後年父から聞いた。もちろん私の記憶にはないが、同じ引揚げ者として辛酸を舐めたのである。

そんな因縁もあって今西氏のファンになったのであるが、私が山登りをするようになり、山行回数が増えるにつれ、氏の１５５２座という数字が気になってきた。いつしかそれが目標になり、登頂数を数えるようになった。そして１５５２座目は今西氏と同じ神戸の高丸山に登ろうと決めた。

そこでその高丸山がどこにあるのか調べるのだが、そんな山はないのだ。山と溪谷社の『評伝　今西錦司』（著者H氏）、ミネルヴァ書房の『今西錦司伝』（著者S氏）によると、両氏とも高丸山とは「神戸市と西宮市の境界に位置し、標高３６６ｍの山」としている。そこで国土地理院のホームページをはじめ、いろいろな地図で神戸・西宮の境界付近を虫メガネで探すのだが、いくら探しても見つからない。境界付近に同じ名前の高丸山という山はあるが、標高が５０８ｍだから今西氏の高丸山とは明らかに違う。ネットでは今西氏の高丸山をこの高丸山と断定しているのを見受けるが、間違っている。どうしても見つからないので、錦司伝の著者S氏に手紙を書いた。すると返事が来て、「五万図・広根の左下隅にある」とのこと。さっそくその地図を取り寄せて左下隅を見る。しかしやはり見当たらない。そこで再度S氏に質問した。するとご丁寧に昭和55年発行の五万図・広根のコピーを送ってくださった。そこには確かに３６６ｍの山があった。

ただその地図には高丸山という名前の記載はない。これは今西氏が地元の人に尋ねて付けた名前ということらしい。したがって、公表されている今西氏の登頂実績として、この名前が使われている。これで高丸山の位置は判明した。しかし、最新の地形図では標高３６３ｍと３ｍ低くなっている。グーグルアースで見ると、そこにあるのはゴルフ場のクラブハウスと駐車場。つまり高丸山は頂上ごと削り取られ、消えてしまったのだ。

山の名前はないし、標高も違うのだから、いくら虫メガネで地図を探しても、見付けられるわけはないのだった。たとえ見付けたとしても、今さらゴルフ場に登っても登山とはいえない。今西氏の生涯最後の山・高丸山は、私にとって幻の山となった。

昨年5月、その１５５２座目を達成する日を迎えた。今西氏の高丸山は消えてしまったが、その代わりに、よく間違えられている標高５０８ｍの高丸山に登った。今西氏の高丸山とは直線距離で5㎞ほどしか離れていない。有馬温泉に近く、頂上からは六甲山の山並みが眺められる。登山道もよく整

備されて登りやすい山だ。黄泉の国で今西氏は苦笑いするだろうが、今西ファンとしてせめてもの同じ名前の高丸山に登った次第である。

阿佐ヶ谷文士村の小島烏水と山友たち

小原茂延

東京には作家や芸術家が多く住んでいた、〇〇文士村と呼ばれる一角がいくつかあった。芥川龍之介や板谷波山などが住んだ田端文士村、室生犀星や中原中也らが集まった馬込文士村はよく知られている。中央線の阿佐ヶ谷、荻窪などにも井伏鱒二、太宰治、亀井勝一郎などの作家が住みついて、阿佐ヶ谷文士村などと呼ばれていた時代があった。日本山岳会の創立および初期に活躍した大先達である小島烏水、高野鷹蔵、中村清太郎、田部重治が住んでいたのをご存じであろうか。

阿佐ヶ谷図書館には「阿佐ヶ谷文士村」の図書コーナーがあり、かつて住んだ文士、芸術家の著書が見られるが、山岳書はほとんど置いていない。パンフレットがあって、著名人の略歴並びに旧邸の位置図が概略記されている。小島烏水、田部重治、棟方志功が採り上げられている（棟方志功は富山に疎開したときに日本山岳会に入会、富山支部の名板を彫っている）。

小島烏水は四国の高松市生まれであるが、2歳のころに一家は横浜市に移っている。同じ横浜市保土谷生まれの岡野金次郎と徴兵検査で出会い、山と浮世絵と芝居好きで意気投合した両人は丹沢・塔ノ岳に登り眼下の菜黄麦緑に感激、さらにそののち、乗鞍岳へ登山の折に槍ヶ岳を望んで登頂を渇望、明治35年にやや無謀ともいえる槍ヶ岳登山を決行した。そして翌年、ウェストンの著書を岡野から聞いた烏水がウェストンにより近代アルピニズムの洗礼を受け、一方で志賀重昂の煽動ともいえる檄に目覚め、志を同じくする〈七人の侍〉は明治38年10月14日に山岳会を設立する。烏水のそれからの探検的登山は『日本アルプス』全4巻に結実され、旺盛な筆力で登山紀行文や随筆など、多数の著書を持つ。

米国での勤務を終えた小島久太烏水は、当時の牛込区にいったん落ち着くが、中村清太郎の紹介で阿佐ヶ谷の敷地に家を新築して昭和5年に移住、横浜の人から東京人となる。すでに関東大震災を機に、高野鷹蔵、田部重治などが周辺に住んでいたので交流もあったことと思われる。ことに中村清太郎とは隣人であり、中村の著『山岳礼拝』中の「追憶」によれば、〈ふと、庭の方から「中村さん」と、尻上がりの優しい声が、聞こえてくるような気がする。小島さんはよくそうした子供らしい呼び方で、入って来られたものだ〉と回想している。亡くなった翌朝、悲報を長男の隼太郎さんが知らせに来られた由である。高野鷹蔵も横浜で関東大震災により家財のすべてを失い、傷心の極みであった。そののち、親しかった中村清太郎に頼んで阿佐ヶ谷に居を定めた。このころからローラカナリアの研究に勤しみ、山階鳥類研究所には、高野鷹蔵文庫が遺されている。

田部重治もまた、関東大震災の1年後、新宿区の西大久保から9月1日を期して阿佐ヶ谷に居を移す。小島烏水や中村清太郎の邸宅とほど近い場所である。かつて大菩薩行で大黒茂谷に迷い込んでしまい、田部の危急を里人に告げて救ったのが中村清太郎であった。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

資料映像委員会――――

「第22回全国山岳博物館等連絡会議」開催

11月17日㈯13時から17時まで日本山岳会集会室において開催した。

参加館は8館。富山県「立山博物館」、立山カルデラ砂防博物館、松本市山と自然博物館、公益財団法人植村記念財団、面河山岳博物館、深田久弥山の文化館、東京都写真美術館、本会からは委員・理事10名が参加した。今回は初参加の深田久弥山の文化館も加わり、昨年より大幅に参加が増えて、集会室満杯のにぎわいとなった。

会議に参加したメンバーの記念撮影

1　北アルプスの氷河

今回の話題の中心は、なんといっても、北アルプスの氷河である。立山カルデラ砂防博物館の飯田肇氏は本会議に毎年熱心に参加いただいているが、実は、日本に氷河があるということを、最初に証明した方で、今やテレビでもたびたび見掛ける氷河に関する第一人者である。2012年に「剱岳・三ノ窓雪渓」をはじめとして3つの氷河を最初に確認した。

その後、市立大町山岳博物館と大町市が組織した学術調査団に飯田氏も加わり、鹿島槍ヶ岳の「カクネ里雪渓」をはじめとする3つの氷河を今年付け加えた。

「カクネ里雪渓」は、信州初の氷河になった。この雪渓の調査は場所的にも困難を極めたようだ。また、これら氷河は、学術的なものにとどまらず、教育、観光など様々な見地からの活用が期待される。

また、日本山岳会と日本の氷河は関わりが深いと飯田氏は言う。五百澤智也氏、元本会会長の今西錦司氏などが氷河研究に大きな貢献をされたようである。ちなみに飯田氏は本会の会員であり、資料映像委員でもある。

2　各館の状況について

【市立大町山岳博物館】

メインの企画展「北アルプス誕生―激動の500万年史」、カクネ里雪渓（氷河）調査、ライチョウ、ニホンカモシカをはじめとする各種調査、教育普及事業などに力を入れている。

【立山カルデラ砂防博物館】

展示会開催、博物館周辺のフィールドを学芸員と巡るツアーの開催、学校行事における児童生徒の利用促進、立山カルデラ砂防体験学習、氷河研究などに力を入れている。

【深田久弥山の文化館】

深田久弥が所持していた多くの文献の展示、収集拡充、文献を通しての交流、イベント「聞こう会」の充実などに力を入れている。

【面河山岳博物館】

石鎚山生物相調査、両生類・爬虫類調査、鉱物調査、危険生物展等に力を入れている。

【富山県「立山博物館」】

企画展「験佛化現」、「立山の明治維新」の実施、出前授業、校外学習、出張展示などの博学連携事業に力を入れている。また、所蔵する多くの立山曼陀羅を国の有形民俗文化財に追加指定すべく作業を行なっているが、その中に皇女和宮から寄進されたものが発見され、対処を急いでいる。

【松本市山と自然博物館】

自然に関して幅広く展示を行なっている。蝶をはじめとする昆虫の標本がたくさんあり、日本山岳会からの寄託資料と併せて展示を行なっていく。

【東京都写真美術館】

平成26年から大規模改修のため全館休館したが、リニューアルオープンした。当館は、あらゆる写真や映像の展示を行なっているが、映画の上映も行なっている。直近

の企画として自然写真家・嶋田忠氏の個展を担当する。

【公益財団法人植村記念財団】

昨年25周年で記念イベントを終えた。今は、極点達成40周年ということで「北極点・グリーンランド単独行」を展示中である。

当会議は22回目を迎えたが、当会議に出席する博物館相互のネットワークが機能して、それぞれの事業展開に役立つようになってきたという意見が多く聞かれた。今後もいっそう各館の発展に役立ちたい。

（齋藤知茂）

『山岳』第114年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十四年（2019年）の発刊は、本年6月下旬を予定しております。原稿の締め切りは3月末となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させて下さい。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

[送り先] 〒274-0073船橋市田喜野井2-1-4 節田重節

TEL 047-476-1273　✉ j-setsuda@ray.ocn.ne.jp

（『山岳』編集委員会）

山行委員会

四国八十八ヶ所歩き遍路

「歩き遍路」はもはや4回目で、最後の締めくくりとなった。今回の行程は前回の解散地、伊予西条駅から65番札所三角寺や75番札所善通寺などを経て、結願寺の88番札所の大窪寺までと、今もって弘法大師が入定されている高野山奥ノ院までの道程である。

10月19日早朝、9名のグループで伊予西条駅を出発した。地元は間もなく秋祭りのシーズン。讃岐観音寺ではまさに本番で、太鼓の練り歩きなども望見できた。天候に恵まれ、雨に祟られたのは1日だけで行程は順調に進んだ。途中、足の故障で1名が離脱したのは残念だったが、8日目の10月26日には最後の結願寺、88番札所の大窪寺を打つことができ、8名が無事八十八ヶ所を結願した。また、有料（2000円）ではあったが、結願証もいただき、これまでの苦しかった道程を思い感無量であった。そののち所用で帰宅した1名を除く7名は、10月27日紀州・九度山から台風による通行止めがほんの数日前解けたばかりの「町石道」をたどって高野山壇上伽藍に登り、翌28日、奥ノ院の院を詣で、納経帳に最後のご朱印をいただいた。

徳島・安楽寺にて住職と記念撮影

思い起こせばいろいろなことがあった。土佐修行場の地では2度も台風に見舞われ、1部区間の歩きを諦めてタクシーに頼ったこともあった（ただし、ほとんどのメンバーは後日この区間を歩き通し、切れ目を埋め合わせている）。

お遍路はなんのためにするのか？　遍路の功徳として現在「3つの幸」が挙げられている。すなわち、信仰・健康・観光が得られるとのようだが、今回の我々のグループでは信仰派が多く、肉親や友人の供養や笈摺に朱印をいただくことなどが主なものであったと思う。また、歩き遍路は札所を一周している間に必ず一度はお大師さんに巡り会える、という言い伝えがある。私も確かにお大師さんにお会いして、お叱りを受けたような気がしてならない。

早春の吉野川に架かる川島橋を渡るメンバー

お遍路人口は年間30万人。うち歩き遍路は1％の3000人と言われている。歩き遍路は1人歩きが多い。グループ遍路は初心者教育には真にけっこうなものだが、グループも大きくなるとスケジュールが優先し、遍路本来の目的の一つである、ほかの遍路や地元の人たちとの交流が希薄になり、情報も入りにくくなることも事実かと思われる。数見（すみ）リーダーが言われた「これからは皆さん1人で巡

ってください」との言葉に倣い、いつの日か穢れが禊せば、今度は1人で自由にゆっくりと巡ってみたいと思っている。

最後に先達リーダーの数見さん、同サブリーダーの杉﨑さんには大変お世話になりました。4回2年にわたり、コースの選定や宿泊所の手配をはじめ、巡礼の作法や体調の管理に至るまで大変ご面倒をお掛けしました。改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

（髙橋満男）

アルパインフォトクラブ
第26回写真展「心に映る山々」

2018年度の写真展は、例年よりやや遅い12月13日から19日まで、今回も新宿区四谷の日本写真文化協会のポートレートギャラリーで開催された。年々ポートレートギャラリーへの写真展の使用申込みが増加しており、確保が厳しい状況になっているが、幸運にも当クラブは13年連続で同会場で開催することができた。

今回の出展数は全部で40点、国内の山が33点と海外の写真が7点である。国内の山は、冬の山と春、夏、秋と季節により分類して展示し、また、花の写真も多くはないものの、シャクナゲやツツジなどをまとめて展示して目立った。

今年の写真サイズは全紙を基本として、7：5または4：3の2種類にそろえたため、全体として統一感のある美しさがあり、来場者からも評価していただけた。

海外の写真のうち1点は、特別出品として故西川元禧さんの遺作「ペルー・ワイワッシュ山群」が展示され、氷雪の鋭鋒が目を惹いた。西川さんは会報「山」に「秘峰登山のススメ」を数回執筆されたことでも知られ、国内外問わず幅広い山行による、多くのすばらしい山の写真を残された。

ポートレートギャラリーの展示会場風景

海外の花の作品では、松永秀和会員の青いケシの仲間でも珍しい赤色のケシの花を含めた写真が出品された。松永会員は毎年、チベットやネパールなどに出かけて青いケシを中心として撮影し、各地の講演会や誌面でも発表しており、日本でも有数の青いケシの写真家として活動している。

なお、今回の出品の中から、花澤廣巳会員のシャクナゲの入った「夕べに添えて」が、日本写真文化協会の機関誌『写真文化』に掲載される。

今回の入場者数は昨年と比べてわずかながら増えて、約570人であった。知人や家族が示し合わせて来場見学し、そののち食事などに出かけて旧交を温める光景も毎年見られる。

写真愛好家の多くの方にアルパインフォトクラブに加わっていただき、写真を撮る、作品に仕上げる、作品として発表して皆さんに見ていただく、という3つの楽しみを味わっていただきたいものである。

今回発表した作品は今年、全国各地を巡回し展示される。概略は、4月から5月にかけて鳥取の伯耆国山岳美術館、6月に酒田市総合文化センター、9月に長野市の柏与フォトサロン、そして、10月にTAKAO599ミュージアムで展示される予定だ。詳細は後日紹介されるので、最寄りの地域の方は足をお運びいただければ幸いである。

別件として、例年5月に都内で「山松会　山小屋サミット夏山相談所」が開催され、アルパインフォトクラブの写真展も併催される。会員にはHPなどで告知されるので、機会があれば併せてご覧いただきたい。

（竹花　晃）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

静岡支部

「山の日」記念事業を4段の構えで実施

静岡支部では「山の日」制定3年目を迎えた昨年、4段の構えで記念事業を実施したので報告する。「山に親しみ」「山の恵みに感謝する」という山の日の主旨に立ち返って行なった。

第1段は、5月10日㈭、静岡市清水区で「静岡市の南アルプスについて」講演会を行なった。講師は支部公益事業委員、自然保護担当の白鳥勝治会員。約200人の参加者に静岡市の南アルプスの山、人、文化などを語り伝えることができた。静岡市民といえども市域の、なかなか見ることのできない南アルプスに3000mの山が10座もあるということはあまり知られていない。まず知り、親しみを持つという意味での講演会は十分な意義があった。

続く第2段は、8月18日㈯、公益事業委員長の小川正育、同委員の中野雅章会員を中心に「山に親しんでもらう、山の恵みに感謝する」をテーマに親子登山を計画。目的地を富士山・宝永山とした。

ほぼ快晴の下、水ヶ塚駐車場に親子参加者14名と支部会員9名が集合。シャトルバスで富士宮口新五合目へ。説明とストレッチの後、新六合目を目指した。新六合目から富士山の植物のカラマツ、オンタデ、イタドリ、ムラサキモメンヅル、フジアザミなどを観察しながら宝永火口に下った。宝永第一火口で富士山の成立ちなどについて会員の説明で学んでもらった。「山に登ったことがないので心配だ」という親御さんの心配をよそに、小学校2年生から中学1年生までの子ども6名、保護者8名と会員の全員が宝永山山頂に到着。

図書受入報告（2018年12月）

著　者	書　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
やぎた晴	山小町 -妻- /Yamakei Creative Selection Frontier Books	278p／19cm	山と溪谷社	2018	著者寄贈
ジャックアンドベティ山の会 (編)	靴跡 ：ジャックアンドベティ山の会創立25周年記念誌	262p／30cm	ジャックアンドベティ山の会	2018	発行者寄贈
鳥取実行委員会 (編)	第3回「山の日」記念全国大会 in 鳥取：大会報告書	100p／30cm	第3回「山の日」記念全国大会 in 鳥取	2018	発行者寄贈
全国「山の日」協議会 (編)	第3回 全国「山の日」フォーラム実施報告書	32p／30cm	全国「山の日」協議会	2018	発行者寄贈
McDonald, Bernadette	Art of Freedom ：The Life and Climbs of Voytek Kurtyka	326p／24cm	Rocky Mountain Books	2017	購入
Scott, Doug	The Ogre ：Biography of a Mountain and the Dremetic Story of the First	178p／24cm	Vertebrate Publishin	2017	購入
D,O,A (eds)	Alpenvereinsjahrbuch Berg 2019 (Band 143)	256p／27cm	D,O,A	2018	発行者寄贈

青空の下、良い集合写真が撮れた。
　11時半、宝永火口に下って昼食。帰路は宝永第二火口、御殿庭上、三辻などで小休止を取りながら下った。最後はやや長い歩きとなったが水ヶ塚公園駐車場へ全員無事に下山した。整理運動後、親子登山参加者全員からひと言ずつ感想を述べてもらった。「とても良かった」「また親子登山の企画があれば参加したい」などの声があり、さわやかな空気の中、安堵感、充実感あふれる解散となった（親子登山は来年度も継続させたいところ）。
　第3段は、例年行なってきた「しずおかスポーツフェスティバル登山大会」の第12回（主催は県体協、県、県教委、県岳連）に県内山岳4団体（県岳連、静岡市岳連、日本山岳会静岡支部、県労山）が参加する形で、10月27日㈯、28日㈰に行なった。今年は県西部を舞台とし、日帰りコースは28日に秋葉神社下社から秋葉神社（８８６ｍ）に登り、32名が参加した。2日コースは、京丸山（１４７０ｍ）を目指した。浜松市春野町みやま会館に集合し、開会式後に登山口まで歩き、テントと屋敷に分宿した。月と紅葉がすばらしい夜だった。２日目は５時過ぎにスタートし、８時15分サンチョ着、みやま会館に11時15分帰着した。この京丸山コースには36名が参加。晴天の下、無事に終了した。
　第４段は、ＪＡＣ静岡支部が提案した「山の日」記念事業としての「南アルプス写真展」を山岳４団体で行なった。６回ほどの打合せと、同時展示会を行なう全日本山岳写真協会静岡支部、そのほかの団体との協議を経て、県、県教委、静岡市、静岡市教委の後援を得て、11月６日㈫～11日㈰に静岡市民ギャラリー（静岡市役所本館１階）で開催した。リニア中央新幹線工事が進むなか、自然保護と自然破壊を観点に、「南アルプス国立公園を知ろう」「南アルプスエコパークを知ろう」とも謳った。
　写真は一般の応募から４団体会員分を含めて四ツ切から全紙までの約１４０点（うちＪＡＣ会員分約50点）が集まり、入場者は約９００名となった。初めての取組みとしては成功したと言えよう。反省点はあるが、今後に向けてさらに取り組みたいと思う。**（有元利通）**

富士山･宝永山山頂で記念撮影に収まる、親子登山参加メンバー

寄附金および助成金などの受入報告
（平成30年11月30日まで）

寄附者など（単位千円）	受入金額など	寄附の目的、その他
木村　操一 会員	15	永年会員として（日本山岳会運営費）
安藤　治 会員	10	永年会員として（日本山岳会運営費）
佐藤　桜子 様	30	日本山岳会運営費
川口　章子 会員	10	山のマナーノート
少額寄付者2名	―	山のマナーノート

会務報告

平成30年度第8回（12月度）理事会議事録

日時　平成30年12月12日㈬19時00分～20時00分
場所　集会室
【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・近藤各理事、平井・石川各監事
【欠席者】清登・斎藤・星・波多野理事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・職員介護休業規程（C－33）の改定について（近藤）

　職員介護休業規程（C－33）（介護短時間勤務）第12条の改定について審議した。（賛成10名、反対な

しで承認）

【報告事項】

1・入会希望者9名、準会員入会希望者3名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2・寄附金7件の受領について報告があった。（古川）

3・記念事業委員会の開催状況について報告があった。（重廣）

4・支部事業委員会の開催状況について報告があった。（重廣）

5・平成30年度（後期）「海外登山助成対象登山計画」募集について報告があった。（重廣）

6・登山計画書の提出状況（2018年11月分）について報告があった。（中山）

7・医療委員会主催・山本正嘉氏講演会の開催状況について報告があった。（野澤）

8・上高地山岳研究所「国有林野使用許可申請」について報告があった。（安井）

9・上高地山岳研究所受水槽取替え工事完了について報告があった。（安井）

10・「ナンダ・コット征服」映画フィルムの立山博物館への寄贈について報告があった。（神長）

11・支部連絡会議の開催状況について報告があった。（永田）

12・「山」12月号の発行について報告があった。（神長）

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会

・平成30年度1月度常務理事会

1月15日㈫　18時30分～

・平成30年度1月度理事会　休会

2・事業計画・予算等

・平成30年12月10日　平成31年度支部および委員会事業計画・予算（提出依頼）

・平成31年1月15日　平成31年度支部および委員会事業計画・予算（提出期限）

・平成31年1月下旬　平成30年度支部および委員会事業報告・会計報告（提出依頼）

・平成31年2月下旬　平成30年度支部および委員会事業報告（提出期限）

・平成31年3月下旬　平成30年度支部および委員会会計報告（提出期限）

ルーム日誌 12月

3日　総務委員会　自然保護委員会　記念事業委員会

4日　常務理事会　スケッチクラブ

5日　図書委員会　山行委員会　バックカントリークラブ

6日　YOUTH CLUB

7日　土曜会

10日　自然保護委員会　スキークラブ

11日　山岳研究所運営委員会　スケッチクラブ

12日　理事会　休山会

13日　支部事業委員会　山岳地理クラブ　九五会

14日　YOUTH CLUB　山の自然学研究会

15日　緑爽会

17日　資料映像委員会

18日　YOUTH CLUB　スキークラブ　里山歴史研究会

19日　YOUTH CLUB　三水会　つくも会

20日　科学委員会　01会　みちのり山の会　マウンテンカルチャークラブ

21日　総務委員会　会報編集委員会　山遊会

25日　デジタルメディア委員会　緑爽会　平日クラブ

26日　家族登山普及委員会　フォトクラブ　麗山会

27日　公益法人運営委員会

12月来室者　429名

会員異動

物故

武内義雄（14006）18・12・18

退会

竹田英世（7828）

塩田純一（9244）

藪田益資（10244）　東京多摩

品竹浩一（12802）　福島

鈴木　潤（15670）

INFORMATION
インフォメーション

◆小豆島八十八ヶ所歩き遍路

山行委員会

小豆島八十八ヶ所１４０kmをサクラを愛でつつ歩きます。弘法大師が修業され、四国お遍路満願後に訪れるお遍路さんも多くいます。遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所霊場会公認先達２名が遍路・巡拝・服装などの作法はお教えします。遍路用品は小豆島霊場総本院で購入できます。

日程　３月31日(日)～４月６日(土)　６泊７日

集合　31日(日)　小豆島霊場総本院12時15分(高松港10時40発、フェリーで土庄(とのしょう)港11時45分着。あるいは高松港11時20分発、高速艇で土庄港11時55分着)

行程　31日64～58番、誓願の塔～59～63番(土庄泊)　１日57～53番、65～80番(小部(こべ)泊)　２日81～88番、12番、13番(安田泊)　３日11～７番、２番、１番、３～６番、10番(安田泊)　４日14番、20～15番、21～27番(池田泊)　５日28～33番、40～42番、35番、39～37番(池田泊)　６日43～49番、74番、49～56番、小豆島霊場総本院(昼ごろ解散)

歩程　１日13～29km(健脚向き)

費用　参加費１万円(通信費、写真代など)、１日１万円(宿泊代はその都度精算、納経、昼食代)、遍路用品は約２万円。別途往復交通費。

定員　10名(先着順)

申込み　３月８日(金)まで、数見直(すみただし)

TEL ０９０－７２０４－４６６８

sanko@jac.or.jp

◆妙高高原大平山スノーシューハイク

山行委員会

新赤倉温泉に前泊し、妙高高原駅近くの大平山にて、スノーシューハイクを楽しみます。

日程　３月２日(土)～３月３日(日)

集合　３月２日午後４時、妙高高原駅

行程　２日　妙高高原駅―ユアーズイン(泊)　３日　宿―大平山―宿―妙高高原駅

解散　３月３日午後４時30分、妙高高原駅

参加費　１万２０００円

募集人数　15名

申込み　２月10日までに菊池武昭宛

TEL ０９０－６３１９－７６０２

sanko@jac.or.jp

＊申込み者に詳細案内をお送りします。

◆松田敏男展

山での心情を投影したシルクスクリーンによる作品を中心に、花や女性への賛歌などの作品を展示。

期間　３月５日(火)～10日(日)　10～16時

場所　法然院講堂　〒６０６－８４２２　京都市左京区鹿ケ谷御所ノ段町30番地(市バス四条河原町から32系統で法然院町下車徒歩８分)

http://honen-in.jp

❖編集後記❖

●昨年暮れ、黒部峡谷ファンにとっては大変嬉しいニュースが飛び込んできました。「関西電力黒部ルート」が２０２４年から一般開放されるとのことです。黒部峡谷鉄道・欅平駅と黒部ダムを結ぶ18kmの同ルートには、竪坑エレベーターや、すべてトンネルのトロッコ列車、インクライン(勾配鉄道)、全トンネル車道など、吉村昭の小説『高熱隧道』や映画『ナバロンの要塞』を彷彿させる見所が一杯。

●私も黒部ダムの竣工前後に、秋と冬の３回通りましたが、黒四地下発電所の巨大さや、インクライン上部から見た厳冬の黒部の峻厳さに圧倒されました。自然と人間が一体となった、ユングフラウ鉄道にも負けない魅力的なルートになることでしょう。　**(節田重節)**

日本山岳会会報　山　884号

2019年(平成31年)1月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　小林政志
編集人　節田重節
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社